

文 献

主要なるものを下に掲げる。

- (1) 池田榮太郎 (1912) 發育重量と容積との關係、實驗蠶体解剖生理論。
- (2) 川瀬惣次郎、岩岡末彦、齋藤良三郎 (1913) 家蠶の發育に伴ふ生体成分の變化に就て、上田蠶絲專門學校學術報告、第一號
- (3) 河野茂盛 (1925) 蠶卵の比重に關する研究、蠶業新報 283—284號
- (4) 八木誠政 (1928) 養蠶及養蠶學上必要なる函數的現象に就て、上田蠶絲專門學校同窓會編、蠶絲科學講演集、第二輯
- (5) 尾藤省三 (1920) 家蠶体液に關する研究 上田蠶絲專門學校同窓會報 第十五號
- (6) 門平潤一郎 (1928) 蠶体々液の理學的性狀(第一報) 体液の比重に就て、蠶絲學雜誌、第一卷、第一號
- (7) 勝又藤夫 (1928) 蠶蛹の分化變態に關する研究、蠶絲學雜誌 第一卷、第一號
- (8) 中島 茂 (1929) 桑葉の組成と蠶兒体液成分との關係、日本農藝化學會誌、第五卷、第七册
- (9) 木暮慎太 (1929) 家蠶幼蟲の成長曲線に就て、動物學雜誌、第四一巻 第四八七號
- (10) 八木誠政 (1929) 生長式に就ての一例、動物學雜誌 第四一巻、第四九一號
- (11) 山崎 壽、谷口岩造 (1931) 蠶兒、蠶蛹の体容積測定法に就て、蠶絲學雜誌 第三卷、第三號

商品としての生絲の性質

石 川 久

茲に所謂生糸の性質とは商品といふ立場から觀察して、主としてその經濟的な性質を問題にする。

第一節 生糸は粗工業品なり

粗工業に依つて生産された物を粗工業品と便宜上呼ぶことにする。さて然らば粗工業とは如何なる工業なるか、粗工業とは『資本家と勞働者と企業者と經營者との分化を有するも、その製品を分拆すると大半が、原料代と勞銀とからなり、固定資本や技術の代償は甚だ少い處の工業である』(註一)

粗工業中纖維工業に屬する物を舉げて、製品原價中に占むる原料費(原料代の代り)を次表に比較すべし。

原價計算(註二)

		工 費 率	原料費率	計
毛	糸	15	85	100
生	糸	22	78	100
綿	糸	24	76	100
絹	紡 糸	46	54	100
人	絹	67	33	100

生糸は原料費が製品原價の七割八分にも當り、粗工業品中にも原料費の多いものであることを知る。工費少なく原料費の多い工業を粗工業或は低度工業と云ひ之と反對の工業を高度工業といふ。日本には粗工業が大部分で高度工業は極く少い(山葉のピアノ位だといふ者あり)。上掲の表にて明か

なる如く、人絹が最も高度化されたもので相對的に人絹工業は纖維工業中の高度工業なりと云ひ得られる。

以上で粗工業品の如何なるものなりやを知り得たから以下順次生糸の性質を究めやうと思ふ。

粗工業品は其の多くが農學的、原始的の物である。用途から見れば原料となるものが多い。生糸は農學的、原始的的色彩を多分に持ち織物其他の原料となる。生糸は生産の伸縮性薄弱にして、従つて市價の統制力に缺けてゐる。之に就ては他の節にて詳説する。

製糸業は既述の如く原料費が多く工費が少いから機械の應用範圍が狭い、之が製糸業の機械化を妨げた一原因である。その機械たるや敢へて機械といはずして、器械といふ處に製糸器械の非機械性がある。製糸工業は工場手工業である。(註三) 生糸の生産は人格的に professional にやる處のものであつて、原價的に機械的に business basis でやる處のものではない。(註四) この意味に於て生糸は粗工業品中手工業品なりと云ひ得られる。其の生産には高度機械の應用、大量生産從而標準化等が不可能である。従つて生糸は代替性に缺けてゐる。之に就ても節を改めて説くことにする。製糸工業に於ては上述の如く労働の生産性の増大並に労働の強化をなす手段を施すに高度工業より困難である。從而生産費が割高となる。

生糸はその生産に自然的制限を受けるから生産の自由性が薄弱である。

生糸の市價の動搖は鋭角的である。之は多くの粗工業品の通有性ではあるが、生糸はその市價の統制力に缺けてゐるが爲めである。一度市價低落に向ふや急轉直下する場合が多い。然るに多くの高度工業品は市價の低落の歩みは誠に遅鈍である。而して粗工業品と高度工業品とは所謂缺狀價格を呈するのである。

最後に述べんとすることは生糸は粗工業品としてその生産者にとりては、不利益なる處の市價經濟の上に立ち、生糸の市價は需要者に依つて決定或は左右される事實である。生産者にとり割のよい、少くとも安全なる工業はその製品市價を生産者自身が決定或は左右する處の原價經濟の上に立つものでなくてはならない。日本の生糸は日本に於て世界産額の六割五分も産し殆んど自然的獨占品なるにも拘らず、日本に於てその市價を決定し左右する力がなく、需要國たる米國に之等の實權があるのである。勝田貞次氏が『若し低度工業が世界市場を相手とするならば、世界市場から統制され世界市場から搾取されるであらう(申略)日本の生糸が現にそうした地位に置かれてゐるではないか』(註五)と申されてゐるのは此の意味である。(參考書一)

(註一) 改造社 經濟學全集四十二卷 勝田貞次氏 日本の産業と企業 P. 217

(註二) 昭和六年三月十九日 中外商業新聞所載

(註三) 井上鑑三氏 製糸工業に於ける産業革命 P. 145—146

(註四) 改造社 經濟學全集 四十一卷 現代日本經濟の研究(上) 勝田貞次氏 日本の財界整理 P. 87

(註五) 改造社 經濟學全集 四十二卷 勝田貞次氏 日本の産業と企業 P. 219

(參考書一) 田中貢氏 繭生糸の將來 P. 164

第二節 生糸は織物纖維の高級品なり

四大纖維の織物として消費さるゝ總量を100とすると、生糸はその中1にも満たない僅少の生産である、即ち稀少である。生糸が高價なるは稀少性にも因るなるべし。故に徒に多産の政策は不可なりと唱へる者もある(例へば阿部嘉藏氏が氏の著書、本邦人絹工業の將來43頁に於てレーヨンの代替性向上に伴つて、天絹の需要が輕減されるだけ、つまりそれだけつつ天絹の貴重さを減じて行くものである。強いてこの貴重さを保持せんとするにはその供給量即ち生産を減ずる外はない、茲に本邦蠶糸業將來の悩みがある、と説かれてゐる。)

生糸は古代から貴重品としてその使用は一部上流階級にのみ限られてゐた。この歴史的事實は Caesar (100-44 B. C.) の頃はローマの貴族にのみ限つて用ゐられたので、當時の値が絹と金と同量で賣買されたこと、我國にても宮中に於て布帛を造るのみに生糸が用ゐられたこと等を列示し得られる。(註一) 尙この事は服飾史の物語る處である。(參考書一) 日本にその例をとると古代から階級によつて衣服の形式、生地、色合等が嚴格に規定され明治維新の頃まで續いてゐる。斯る時代に於ては生糸は勿論上流の一部階級にのみ使用されてゐた。外國にも斯る例があつた(參考書二) 現代になつて斯る制限が撤廢されてその使用は全く自由であるけれども高價なるが故に、矢張上流階級の使用に極限される傾向がある。

米國に於て1864年より絹物に六割の高率な從價輸入關稅を課することになり、その課稅理由として Luxury 奢侈品であるからだとされてゐる。(註二) 然乍米國が經濟的に世界に優位を占むるに至つて以來國民の購買力頗る増大して有ゆる階級を通じて必需品として消費されるに至つた。早川博士も『生糸は既に奢侈品より出でて必需品たる域に入らんとするに至れり』(註三)と申された。R. C. Rawley 氏も同様に云ふてゐる。(註四)

必需品であるとしても其の價が高く世界的に好況時は勿論不景氣時代にも消費されるといふ域には達しない、然も下層階級の者は未だ必需品として消費しない、茲には奢侈品といふ代りに高級品なりといふことにする。

生糸は實質的價値及經濟的價値を有し價格高し、斯る生糸が如何なる經濟的性質を有するかを以下検討しやう。

高級品なるが故に常用食糧品の如く生理上の必需品とは異なり需要に弾力性が強い。(註五) 即ち生糸の價格騰貴するときはその需要量は減少し、下落する時はその需要量は増大する傾向がある。然るに事實に於ては正に反對の傾向を示す場合がある。即ち生糸の市價騰貴に向ふと競ふて實需買或は思感買をする。市價が下り坂になると買ふことを手控へる。之は生糸市價統制力に缺けてゐる爲め騰貴する時は異常に急激に昂騰するから一刻も早くより安き時に買はんとあせり、下落するときは鋭角的に歩むからより安くなる時期を待たんとする心理からなるべし。戸田博士は生糸の需要の弾力性の強きことを論ぜられ次の如く申されてゐるが、事實に照し左程ではない。『生糸の價格を一割引下ぐれば其需要が二割三割の増加をなすと云ふが如く、供給増加の割合に價格下落の不利なし』。(註六) 併乍需要の弾力性は微弱ながらあるといはざる可からず。

次に高級品なる生糸と流行との關係を觀やう。聊々流行と直接に關係ある處の心的傾向を分析すると、自分より偉いとか秀れたとか美しいと感じて居る者に從つて行かうとする事大性と、新奇を好む新愛性とがある。この中事大性と關係あるものは卓越願望である。(參考書三) 卓越願望とは自分は他人よりも優秀であらんとする願望である。之は人類共通の願望であつて、高級な優れた人目をひく美しい衣服を身に飾らんとする願望もその一つであり、最も通俗の願望である。或一人或は一階級が高級な優秀な美麗なる衣服を身に纏ふや否や上述の事大性に基いて有ゆる階級にその衣服が流行する。概して流行は上より下に流れる。故に高級なる絹織物が上流階級に使はれると下層階級にまで流行せんとする。而して高級なるものを一旦使用せんか、その使用を斷つことは却々困難である。斯る見地よりすると生糸の消費從而需要は漸次増大するであらう。又文明の進むに伴て人類は奢侈に傾き或は平和の時は人心軟弱となり生糸の嗜好を助長するが如し、斯くして生糸の需要は増加するであらう。

然し如何に事大性によりて上より下に流行があつても或る限度がある。此の限界は吾人の購買力が割く、即ち高級品を購入せんと憧がれても購買力が之に伴はねば購入が出来ない、更に此の限界はより深くより強く割かれるに至つた。それは人絹の出現であらう。人絹といふ優秀なる代用品が出来た

から生糸の需要は非常に制約せられるに至つた。

尙特筆す可き事は人絹製造技術の進歩著しく人絹織物と天絹織物と一見識別し能はざるに至つた一事ではあるまいか。

近來絹織物の節織或は紬織物が市場にて歓迎されるのは、天然絹糸製品と人絹製品との混同を避んとする傾向の現れであらう、蓋し上述の心理からして高價なる本物の天然絹糸製品を着用するからには、目立つて他の物と區別されんことを欲するからである。然し此の天然絹糸の行方は逆であり一種の敗北である。

次に生産及消費の標準化と生糸の關係を究めんと思ふ、現代經濟組織及經濟事情の下に必然的に生れたのは生産及消費の標準化である。即ち成る可く多數消費を目的に標準化されたる成る可く大量の生産をなさんとするに至つた。之の方法は需給兩者にとつて利益である。生糸は第一節に既述せるが如く粗工業品にして、その生産工程に機械の使用が少いから高度機械による大量生産制の適用を望み得ない。併も高價であるから大衆的消費を望み得ない。人絹は生産に自由性あり、高度機械の使用をなし、大量生産が可能で標準化が行はれ得る。製品は廉價であるから消費も標準化し大衆向である。天絹は此の點に於て時代遅れの商品であるといふて過言ではあるまい。戸田博士も現代は平民の世界であり、今日の生産者は安價なるものを造りて大多數の平民階級を相手とせざる可からざることを夙に唱導されてゐる。(註七) 天絹が時代遅れの商品とすれば人絹は實に modern な商品である『多くの大衆は資本家層の下に於て天絹に對し萬丈の垂涎を流し乍ら年々生活の窮乏化に追ひ立てられてゐる(中略)人絹は天絹に比し幾多の遜色を持ち乍ら尙且營利産業として超飛躍的發展を遂げるに到つたその經濟的根據は社會の大部分である大衆生活の經濟的條件に基く』(註八)

上述の標準化と關係あることにして看過し得ざる重要なことは現今殆んど有ゆる商品は質より量に重きを置いて生産さるゝに至つたことである。正しく『世界は既にヨーロッパ的(質)からアメリカ的(量)へ移つてゐるのだ』(註九) 一般に內的質より寧ろ低廉にして外觀の美なる物が民衆に歓迎せられる。殊に衣服の如きは流行の變遷が潮繁なるより低廉で外觀の美しい人絹が大衆に向く處の商品である。

(註一) 中原虎男氏 織物雜考

(註二) Mason : The American Silke Industry and the Tariff. P. 56

(註三) 製絲經濟學 P. 574

(註四) The Silk Industry and Trade.

(註五) 戸田海市民 經濟論叢十六卷二號 養蠶業の擴張及改善 PP. 67—68

(註六) 同上

(註七) 戸田海市民 工業經濟論 PP. 97—99

(註八) 蠶絲界報 四百七十號 中澤辨次郎氏 レイヨン工業の發展と生糸産業の將來

(註九) 室伏高信氏 アメリカ其經濟と文明 P. 37

(參考書一) 日本風俗史講座 日本服飾史

(參考書二) マアシアル經濟學原理、大塚金之助氏譯 一卷 PP. 176—177

(參考書三) 同上 P. 176

第三節 生糸は本邦に於て自然的獨占品なり

リーマンは獨占の分類をなして自然的獨占、特許的獨占及契約的獨占の三種となす。自然的獨占とは自然的條件により稀少なるが爲めに獨占せらるゝものなり。氏はその獨占の目的對照象を物財と給付とに大別してゐるが、茲には物財のみを問題とする。その物財としてアスファルト(トリニダツド)、

モナザイト(ブラジル及印度)等を擧げてゐるが此等の外に智利の硝石、ブラジルの珈琲、日本の天然樟腦及蠶糸等がある。

日本の生糸は世界産額の大半を占むるに依つて自然的獨占を有するといふても差支ない。獨占してゐるのであるから生産制限或は各種の保管及出荷制限即供給制限に依つて生糸市價の統制をなし得る筈である。故に再度生糸恐慌に際して上述の統制が行はれたが殆んど其度毎に失敗に終りを告げてゐる、失敗の原因は制限の時期或方法等が誤つてゐたからにあることあり、或は第一節に既に述べしが如く生糸の統制力に缺けてゐることに歸するあり。尙統制体内部以外に外部的的經濟的社會的事情で統制効果が表面に現はれず相殺された場合もあらう。兎に角、本質として自然的獨占を有して居る。

最後に述べべきは獨占による統制の効果は所謂交換對座(註一)によりて本質として獨占力を有するとも相違を來し、或は効果がない場合あり、或は効果が著しい場合もあることである、米國は經濟的に斷然日本を凌駕してゐる、且日本の生糸は殆んど米國により需要が獨占されてゐる。而して日本の生糸市價は米國の需要者に依つて自由に決定或は左右されるといふ交換對座に於ては供給の自然的獨占を利用して市價統制を圖らんとするは難事ではあるまいか。

(註一) リーフマン經濟原論 第二版 宮田喜代藏氏譯 PP. 71—2

參考書 中央蠶絲報百三十八號、生産制限に關する一般考察 國民經濟雜誌 五十卷六號 上田貞次郎氏
自然的獨占品價格統制 田中貢氏 繭生絲の將來 P. 164

第四節 生糸は有機的な原始的商品なり

『近世技術の特色は有機的のものを成る可く無機化すること之れである、動物や植物からのみ取つた材料を礦物から取るやうになつたり、殊に動植物染料に代ふるに礦物染料を以てするやうになり人間の力に代ふるに機械の力を以てし農産の原料を代ふるに各種の化學工業品を以てすること等は皆有機的のものに代ふるに無機的のものを以てする實例である』と福田博士は唱へられた。(註一) 小嶋精一氏も福田博士と同様な意味で説かれてゐる(註二)(參考書一)。

斯くの如く工業品は無機化、物質化、文化の趨勢の現代に於て生糸は有機的、人格表現的(質的)、原始的商品である。無機の商品生産は高度機械の使用、各種科學的技術の應用により大規模に生産をなすが生糸は全く之に反した生産方法をとる、従つて無機の商品よりも生糸の原價は相對的に高い。

現代の無機化、物質化の世に於ては吾人の趣味嗜好等がそれに馴らされて行き、有機的な質的な物の理解が漸次薄らいで行くのである。思想まで機械觀的に物質的になり行くではないか。

日本人は滋味のある間色を世界人種中最も理解してゐるといふ。(註三) 絹の持つ獨特の光澤、鳴り、手觸等の極めて微妙なる點もよく理解してゐる。斯る天絹の眞價を知らずして誰かよく大金を拂ひ購ふものあらうや、併し文物の交通は國際的に自由に容易に行はれる今日に於ては日本特産の天絹の理解並に日本の國民性の理解が容易に行はれ得るであらう。然らずんば天絹の地理的販路擴張は困難ならん。

最後に述べんとするは「正」に「反」が對立するのが世の常であるとせば物質文明の所産なる機械的、物質的沒趣味な物に對して天絹は正に之に反するものであることは天絹の一大強味である。蓋し天絹は既に述べたる如く非機械的で質的である。

生糸には東洋文明的な深味がある、數字で計り機械で律し得られぬ深遠さがある。此の特性を充分に發揮せしめることこそ生糸の活くる路であらう。

(註一) 福田徳三氏 國民經濟講話 P. 660

(註二) 日本評論社 現代經濟學全集 十六卷 工業政策

(註三) 明石國助氏 日本染織史 P. 13

(參考書一) 改造社 經濟學全集 四十三卷 PP. 30—32

第五節 生糸の代替性

茲に代替性とは或る一つの商品が(例へば人絹が)他の一つの商品に(例へば生糸に)代用し或は代り得る性質をいふのではない(註一)此處では上述の如く異種商品間の代替性ではなくて同一商品間の代替性を指すのである。例を擧げて説明すると甲の有する金一匁と乙、丙、丁等有ゆる人の持つ金一匁とでは相互に代替し得る。甲と乙、丙、丁等が各自の有する金を相手方の金と交換し代替するは金の内的均質性に基く、自分の持つ金と相手方が持つ金と内的均質性を有し同價値なることを知つてゐるから代替するに何の疑念を起さずに速に交換するであらう。(或る純分を含む一金塊から一匁宛取つたものと假定しての論)金の代替性を利用して貨幣とするのである。上述により知られる如く代替性を有する物は必ず内的均質性がなくてはならない。

さて商品は代替性を有する物程流通性に富む。代替性に富めば速に大量の取引をなすことも出来る又速に大量の取引をなす取引所の標準物質取引の目的物となり得る。代替性に富むときは取引所の標準物が如何なる品質なりや是一般に知悉せられてゐるから取引所の公報する公定相場は物價の明瞭なる基準となり、物質の變動を正確に明快に知られる、従つて需要者も供給者も經濟主義に基いて迅速に自己の行動を取り得る、斯る商品は取引所を市場中心として市場範圍は擴大するに至る、従つて市價は時間空間的に平準するに至る。斯る市場を持つ經濟組織こそ吾人の理想である。(參考書一)生糸は比較的代替性に富む商品であると云はれ(註二)或は代替性に富むるから著しく流通性に富むとも云はれる。(註三)代替性に富むとはいへ比較的事である、生糸の代替性は綿糸にも人絹にも劣る。生糸は粗工業品にして併も生産には人力を多分に要するから製品は精巧化され整正されない。同一工場の生産の一捆の中のものとも雖も内的均質性に缺けてゐる、現物市場の最優等格といふ標準物が如何なる品質のものなりやを確に誰にも判つてゐないといふ様では取引は往々不圓滑になり易いのは當然である。

代替性を有すると標準化が容易である、而して標準化された商品は第二節に既に述べし如き利益ある外賣買取りに便利あり且標準化せられざるものに比し、多少高價にても販賣し得る利益等がある。(註四、參考書二)

代替性を持つ商品は國內或は國際カルテル或はトラストの實現が容易である。代替性に缺けてゐる生糸はこの點に於ても不利である。(註五)蓋し工場により非常に品質が相違する如き現状では優秀な生糸を産する工場と然らざる工場との協同は難事であるからである。

幾何學上の整正なる形体は快感の對照となる。何んとなればその把握が甚だ高度に精神の本性中に於ける傾向に適合するからである。而して茲に整正とは一つの全体、部分、要素、容狀の調和の謂である。松かさ、パイナップル、サボテンの刺毛等の發生律は實に整然とした体系であり、孔雀の翼翅の放射線狀の美、グラジオラスの連続の美等は何れも自然界が有する整一の形に關する生存美である。さて生糸の代替性の素因たる内的均質性即整正に就て考察すると脚線美を整正せる絹靴下に依つて完全に表現せんとするとき生糸の糸條斑の重要性を自づと知り得られる、若し製糸工業に於て高度機械の使用あらば製品は極めて精巧化され整正され従つて又代替性が強くなる。表面平滑なる美しき織物も斯る糸により始めて織出さる。(參考書三)

(註一) 阿部嘉藏氏 本邦人絹工業の將來 P. 41 P. 43等には此の意味で用ひられてゐる。

(註二) 千倉書房 商學全集 十二卷 福田敬太郎氏 市場論 P. 36

(註三) 中央蠶絲報 百三十六號 林連水氏 全國製絲業者に倣す

(註四) 千倉書房 商學全集 十四卷 小林行昌氏 賣買論 P. 147

(註五) 土方成美氏 日本經濟研究 PP. 80—81

(參考書一) 前掲 市場論

(參考書二) リップス 美學大系 稻垣末松氏譯 宮下孝雄氏 裝飾構成の研究

長見公祐氏 世界人造絹糸工業中朝比奈見十氏の工業化學會臨時講演會の部

第六節 市價統制力の缺くる商品なり

自由競争をする無政府的な生産制は破れて現代は企業の集中による大資本の獨占形態が現れ市價を統制するやうになつた。『凡そ工業は統制力を有しなければ安定し發達し得るものではないのである。市場經濟の動搖に支配されてゐたのでは工業の安定發達は望めぬのである。現に日本では安定し發達しつつある工業になると皆市場經濟の動搖を逆に統制し市價の動搖は市場に轉嫁しつつある。紡績業の如きはその一例である、(中略) 製紙業が比較的安定してゐるのも製紙會社が三、四に集中し原料獨占をなすうに至れる爲めなるを見て分るではないか』(註一)

抑々市價は正當なる場合に生糸の需給の數量的關係によつて變動するのであるが、既に述べたが如く生糸は農業的原始的商品でその生産は自然の支配を受け季節により年により増減して安定性がない。従而供給は變動して止まない。故に需要が恒常であつても市價は動搖する譯である。併々世界の生糸産額の大半を占むる日本に於てはその原料たる繭の收穫量はやゝ幾分の規則的漸増はあつたが安定して來たのである。其の原因は養蠶技術の進歩による遠蠶の減少、養蠶地域の擴大及普通化によつて自然的人爲的或る地方の收穫の減はそれを他地方が補はれるといふにあり、次に需要方面を考察すると或る論者の如く生糸は必需品化したとせば需要に安定性があるとも謂ひ得らる。然れども生糸は米國の需要獨占到屬し米國といふ一國の經濟的社會的變化によつて需要に大なる伸縮を惹起することは明白である。斯くして需要に安定性がない。従而正常の時に供給が變りなくとも市價は動搖する。過去に於て市價は米國の需要者側の事狀で動搖してゐる(註二)以上の如く主として數量的方面の需給關係に因る市價の動搖以外に既に處々に於て述べしが如く市價は動搖常なく併も動搖率比較的大である。

以下述べんとするは、市價統制を行ふ爲めの生産及供給の制限に就いてである。生糸はその生産及供給の無統制なるが爲め市價の統制は殆んど不可能である。先づ生産及供給の制限の困難なることを究めやう、生糸の原料たる繭の生産を見ると。

(1) 群小多數の農家が養蠶を各地に遍く行ふから協定による生産制限は困難なること。

(2) 養蠶を副業として行ふから損をしつゝも續行する。

(3) 桑樹は長根のもので掘込植込が自由でないこと、桑葉は養蠶しないときは徒に落葉して了ふから損失をしながらも養蠶を續けしめる場合が多い。

次に生糸の生産及供給を見ると之も亦制限には大なる困難が存するを知る。

先づ生産方面から見やう。

(1) 上述によりては生産された繭は生糸にするより外に用途がないから殆んど全部生糸となるより制限は困難である。

(2) 生糸は群小製糸工場に於て生産されてゐるから協定は容易でないこと。

(3) 生糸は既述せる如く代替性に欠けてゐるから協定は困難であること。

(4) 生産に人力を多く要するから協定して生産設備の制限をするも能率の増進により無効になり易いこと。

次に供給方面から見ん。

(1) 製糸業は小資本經營の工業が多く耐久力がないこと従つて出荷制限は困難である。

(2) 製糸業に於ては生産系統と販賣系統とが分離してゐる爲め商人は利己心にて製糸家に損失を蒙らしむる行動をなしかねない。

(3) 生糸の保存性が薄弱なため保管を長年月することが出来ない。

(註一) 改造社 經濟學全集 四十二卷 勝田貞次氏 日本産業と企業 PP. 223—224

(註二) 土方成美氏 日本經濟の研究 上卷 PP. 64—75 田中貢氏 繭生絲の將來 P. 168

其他參考書 改造社 經濟學全集 四十二卷 早川直瀨氏 蠶業經濟 エコノミスト 第八年十一號

結 論

以上の外生糸の保存性及運搬性に就いても論ぜなければならぬのであるが省略した。要之、生糸の經濟的性質を大略説明し得たと思ふ。各節に就て生糸の缺點を率直に指摘するに躊躇しなかつた。生糸は商品としてその市場性を次第に奪はれて行くのではなきやを疑ふ者である。早川博士が其の著書製絲經濟學 570 頁に於て『前二表に示せる如く、生糸の價格は過去六七十年間殆んど大なる差異なかりしは寧ろ奇異なる感なくんばあらず』と驚かれ、尙比較的低廉なることを述べられてゐる事を吾人は何んと考ふるか。又昨年來の殺人的安値を何んと見るか。興ふる者は興へられるといふに非ずや。然らば若し生糸が實質的及經濟的價值を有し併も大衆の要求する處に合致するものならばその貢獻の程度丈の市價を惠まれねばならぬに上述の如く比較的安全きは此處に何等かの不合理なしと誰が云ひ得やう。私は此の研究に依つて一つの暗示を得たのを幸と思ふ。

(昭和六年七月十五日受理)

種々なる絹の各種形態の窒素の分布に就きて

井 上 柳 梧

坂 本 孝 子

I 各種の絹絲類のアミノ酸組成に就きては已に多數の研究によりて其組成も大体に於て明かなるに到れり。著者が已に發表(東京化學會誌 第三六帙 第二二頁及同誌第三九帙三〇一頁)したるが如く是等絹絲のアミノ酸組成は glycocoll, alanine 及 Tyrosine に著しく富みて居り其他のアミノ酸は其含量が少ないが然し野蠶絲に於ては稍其組成を異にし家蠶絲に多量に含有せられて居る。是等の三つのアミノ酸は其量多からずして他のアミノ酸類が増加して居るのである。

絹を構成せる各種窒素化合物の窒素の形態に就きても已に研究せられたる處あり。著者等は各種の絹を得る機會を得たるを以て是等絹絲類に於ける各種形態の窒素の分布を決定し更に家蠶の Fibroin 及 Sericin の窒素の分布と比較する事を得たのである。次ぎに其大要を記す。

II 實 験

實驗に供したる物は次の如くである。

樗 蠶 (Attacus Cynthia)

柞 蠶 (Antheraea Perni)

天 蠶 (Antheraea Yamamai)